

CSを活用した学校課題解決に向けた取組 【観点Ⅳ】

由布市立挾間中学校（生徒数 552 人 学級数 23） 大分教育事務所

現状・課題

- ・不登校・特別支援教育へのニーズの増加と対応の複雑化
- ・学力向上に向けた人的リソース確保の困難さ

学校運営協議会（CS）を活用した課題解決への特化

Step1

課題の共有

学校の課題を、不登校の状況、授業での学習状況、教職員の負担感など**客観データと事実を用いて説明**し、学校として支援してほしいことを具体的に示した。

- ・学校が「**本気で取り組もうとしている**」ことが、地域に十分に伝わった。
- ・CS委員に「自分にもできることはないか」という**当事者意識が生まれた**。

Step2

熟議と役割分担

テーマを「不登校等、困りを抱える生徒への支援」に焦点化し、対等な立場で熟議

「大学生や卒業生に協力を求めてはどうか」、「公民館事業とつなげれば居場所をつくれるのでは」などの**多様な提案が生まれ、役割分担と支援方法が明確**になった。

Step3

自発的な協働活動の実践

実践① 登校支援教室への訪問（CS委員）

実践② 学習に困りを抱える生徒への地域人材（大学生等）の協力を得た「中学生学び応援教室」開催

実践③ 不登校生徒への学校外での体験活動（公民館教室等）による居場所づくり支援

実践④ 保護者向け「先輩ママとのお話会」開催



↑CS委員が作成した案内文書→

実施後に内容等を見直ししながら定期的に開催している。

- 新規不登校生、長期欠席生の欠席日数が大幅に減少
- 公民館体験活動や相談会の参加者が増加
- CS委員が学校運営の参画者として主体的に関わるようになった。

成果

関係者の声

- 学校の課題や困りを中心に熟議ができる関係になっている。
- 生徒や全教職員との関係性については、より強固なものにしていきたい。
- 特別支援教育コーディネーターや生徒支援コーディネーターとの連携や小学校の運営協議会と話ができる場づくりを進めていきたい。

【導入を検討する学校へ】

- ・本取組のほとんどは、**費用ゼロ**でスタート。小・中どちらでも再現性が高い。
- ・**当初は、課題説明の精度を高める**ことに注力！これが「**協働のスイッチ**」となる。
- ・**困りごとを本音で共有**することで、地域側の主体性や協力が自然と高まる。